

H. ブッシュネル『キリスト教養育』解題からの考察

— 今日のキリスト教保育論の形成にむけて —

H. Bushnell's Outlook on Christian Nurture and Childcare

小見のぞみ*

抄 録

日本におけるキリスト教保育・教育の草創期の理論形成に、大きな影響を与えたアメリカの自由主義教育観と宗教教育運動について、それらの出発点ともなり、その思想の基礎とも考えられる、ホーレス・ブッシュネルの『キリスト教養育』を取り上げ、考察する。

小論では、原著発行から150年を経て2009年に出版された邦訳と先行研究を踏まえながらも、*Christian Nurture* を私訳、解題する。特に『キリスト教養育』の主要なテーマが記述される第1章について1. 「主の養育」と呼ばれるものへの信頼、2. 「キリスト教教育」と呼ばれているものの誤り、3. 子ども時代の十全な宗教的生長、4. キリスト教養育の基礎としての「親子の有機的つながり」の4つのテーマから検証する。

これらの理解に立って、ブッシュネルの著作と思想において展開される子ども理解、キリスト教教育・養育理解が、今日のキリスト教保育・キリスト教教育理論と現場に与える示唆や方向性について論述する。

キーワード：宗教教育、主の養育、親子の有機的つながり

序

近代日本の幼児教育、保育は、フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) の幼稚園 (Kindergarten) の流れを受けて形成され、ペスタロッチーフレーベルと続くドイツの教育学にその理論的根拠を据えて展開されてきたことは言うまでもない。日本におけるキリスト教保育も、当然、子どもを「神的本質を有する存在」としてとらえ、幼児の心にある神性を伸ばすことを基本とするフレーベルの宗教教育、情操教育の影響の中でその歩を進めてきたと考えられる。

しかしながら、近代日本のキリスト教宣教の歴史をそこに重ね合わせてみると、米国ミッション、

つまりアメリカの宣教諸団体から送られてきた宣教師による教育、保育を用いた伝道が、実質的に主流であったことを忘れてはならない。¹⁾つまり、日本のキリスト教会、幼稚園、学校は、その草創期において、当時のアメリカの神学、教育学、心理学等（それはもちろん欧州で展開された学説、理念との密接な関係をもって発達したものだ）の影響を強く受けていたはずなのである。

特に1880年ごろからとされる日本のキリスト教幼稚園における保育を考える際に重要なのは、1860年代からなされていたキリスト教主義学校の創設と展開、ならびに日曜学校 (安息日学校) 運動を用いた宣教の実際が、そこに影響していたことである。²⁾そこで、日本のキリスト教保育理論ならびにキリス

* Komi Nozomi 聖和短期大学教授 (キリスト教保育Ⅱ、子どもと人権)

1) NCC 教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み』教文館、2007、pp. 16-27参照。

2) 日本宣教の初めから、宣教師団体は、日曜学校とキリスト教主義学校の創設に努め、特に女子教育、幼児教育の開始には精力が傾けられていた。日本のキリスト教幼稚園と呼ばれるものは、桜井ちかの桜井女子高付属幼稚園 (1880.4.1)、ハリエット・ブリテンの横浜英和女学校付属早苗幼稚園 (1880.10.28) などがその初めとされているが、その10年前、1871年には米国婦人一致外国伝道協会のメアリー・ブラインらがミッション・ホーム (亜米利加婦人教授所) という家庭的組織の学校を創設し、女子教育と「混血児」の養育にあたっている。また、1876年に創立された日本初の幼稚園である東京女子師範学校付属幼稚園の保母となる近藤はま (浜) は、北米長老教会宣教師のジュリア・カロザースが1870年から開いていた築地六番女学校に学んでいる。さらに当時のミッションの女学校の生徒たちと日曜学校運動は切り離せない関係にある。これらのことから、日本の保育事業が米国ミッションとの関係の中で拓かれていったことは明らかである。森下憲郷「築地居留地における幼児教育の源流」、『近代文化の原点—築地居留地』Vol. 1 築地居留地研究会、2000年、参照。

ト教に基づく子ども理解、家庭理解の形成と、キリスト教保育を担う保育者養成との原点を掘り起こす際、その草創の時代に主に米国の宣教団体が保持していた宗教教育の理念を探り、これを踏まえることは、欠くことができない過程であると思われる。

この理解に立って、明治期から戦前に至る日本にもたらされた米国のキリスト教教育の影響をみると、最も大きなものとしてあげられるのは、1900年前後から1940年代にいたるまで、米国を中心として一大ムーブメントとなっていく宗教教育運動とそれを支えた宗教教育理論であるといえるだろう。³⁾宗教教育は、自由主義神学の信仰理解と進歩主義的な教育理論に根拠をおき、この一大潮流の中、1903年、シカゴに Religious Education Association が設立される。この考え方が、日本における大正自由主義教育や新教育運動と繋がり、自由保育や進歩主義的な保育理解と深く関連したのである。

このような、米国の宗教教育理論と日本のキリスト教保育の形成との関係についてはさらに綿密な研究が深められる必要があるが⁴⁾、小論ではこのうちで、20世紀初頭に開花するキリスト教宗教教育運動の父とされているホーレス・ブッシュネル (Horace Bushnell, 1802-1876)⁵⁾を取り上げ、宗教教育と呼ばれていくものの理論的礎となった彼の名著 *Christian Nurture* 『キリスト教養育』を解題する。ブッシュネルは、フレーベルに遅れること約20年の人物であり、おそらくフレーベルの保育理論を意識

したと思われる表現がこの著作にはちりばめられている。そのような点も踏まえながら、この著作が持つ、日本のキリスト教保育理論を形成する上での先駆的な役割に注目し、古典的名著の今日的意義を掘り起こすことができると考える。

さて、解題を試みようとするブッシュネルの *Christian Nurture* は、その成立経緯が複雑な書物で、成立過程においても多くの論争を引き起こして、変遷を繰り返してきた。⁶⁾さらに、難解で長文の英語のゆえに、邦訳は最終版とされているものの発行から150年を経ようとする昨2009年となったという著作である。この邦訳と先行研究を踏まえながらも⁷⁾、本稿においては、1867年版の *Christian Nurture*⁸⁾を私訳、解題していく。

リバイバルによる救いが強調され、信仰覚醒運動が教会を席捲し、一方で日曜学校とコモン・スクールが信仰と教育を担うようなり、⁹⁾クリスチャンホームにおける教育の意味や子ども時代の宗教的「生長」の重要性が全く顧みられなかった時代。150年前の米国の状況を批判して生まれた宗教教育と養育論が、クリスチャンホームがない異教社会の日本にどのようなにもちこまれたのか。この理論は、かえって日本におけるキリスト教保育の可能性と、教会の養育家庭化への示唆を与え、リバイバル的な伝道から子ども時代の信仰における生長と養育へと、日本宣教と教育・保育の方向性を定めるものとなったのではないのか。これらの問題意識と仮説を持ち

- 3) 当時の宗教教育を代表する指導者に、George Albert Coe があげられる。また「宗教教育」という用語に対して、「キリスト教教育」という場合、それは主に1930年代から、特に戦後盛んになった、自由主義神学に対抗する弁証法神学(危機神学)の理論に立つ教育となる。『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010年 pp. 214—215の宗教教育運動についての記述を参照。
- 4) 米国の宗教教育運動を日本のキリスト教教育・保育界に持ち込んだ人物として、筆者は田村直臣(1858~1954)に特に注目する。彼はまた、本稿で取り上げる H. ブッシュネルの養育論の影響を最も強く受け、それを日本のキリスト教教育において実践しようとしたと存在であると思われる。田村の思想については、小見のぞみ「田村直臣の見た『子ども・キリスト教・教育』」、『日曜学校教案誌にみる日曜学校教育』聖和大学キリスト教と教育研究所、2003年を参照。
- 5) ニューイングランド、コネティカット州リッチフィールドに生まれる。信仰深い母の影響下、聖公会の教会で幼児洗礼を受け、両親の会衆派教会への移籍に伴いその信者となる。1832年にイエール神学校卒業後、コネティカット州ハートフォードの North Congregational Church に牧師として就任し、26年にわたって生涯唯一の教会を牧会する。
- 6) *Christian Nurture* の基礎となるブッシュネルの養育論は、1838年から彼が教育、牧会したハートフォードの北会衆派教会での初期の経験に基づいた論説に始まり、1846年のハートフォード地域の牧師会での講演を骨子とした *Discourses on Christian Nurture* にその主要なテーマをみることができる。しかし、この小冊子は、マサチューセッツ安息日学校協会より47年に発行されるや、多くの批判を受け、同協会はブッシュネルの同意なしに、数カ月後に店頭からこれを回収するという事態に陥ったという。この後も論争と反論は繰り返され、修正が加えられて、1861年版を最終版とした後も、娘 Mary Bushnell Cheney の要請による加筆版や、1967年イエール大版、1979年のリプリント版など多くの版が存在する。
- 7) ブッシュネルの養育論と当時のアメリカの神学的背景、*Christian Nurture* 成立論争史等の先行研究としては、奥田和弘「H. ブッシュネルにおける信仰の教育」『聖和女子大学論集』第2号、1972年、安達寿孝「ホーレス・ブッシュネルのキリスト教養育における家庭観」『金城学院大学論集人間科学編』19号、1994年、森田美千代『ブッシュネル『キリスト教養育』の成立過程研究』日本キリスト教団出版局、2005年、ならびに H. ブッシュネル著、森田美千代訳『キリスト教養育』教文館、2009年を参照。
- 8) Horace Bushnell, *Christian Nurture*, (New York: Charles Scribner & Co., 1867)
- 9) 安達寿孝、前掲論文、pp. 6-7。

ながら、小論ではブッシュネルの主要テーマが披歴される第1部理論 (The Doctrine) の第1章キリスト教養育とは何か I を取り上げ¹⁰⁾、主張を4つの側面から論じていく。

1. 「主の養育」と呼ばれるものへの信頼

Christian Nurture は、新約聖書エフェソの信徒への手紙6章4節ではじまる。ブッシュネルが引用している聖書は“Bring them up in the nurture and admonition of the Lord.” (KJV)¹¹⁾で、直訳するならば、「主の養育と勧告の中で、彼らを育てなさい」となる。ここから、「主の養育」the nurture of the Lord という語が取り出され、「養育」は、著作のタイトルに用いられるほど重要な意味を持たされて使用されていくことになる。

しかしここで「養育」とされている語は、ギリシャ語の *παιδεία* (パイデア) で、「主のパイデア」と言う時の聖書の意味と翻訳は、大いに研究、議論を呼ぶものとなっている。実際この語は、ギリシャ語辞典によれば、「訓練、指導、こらしめ、懲戒、教育」¹²⁾など、養育という優しいニュアンスよりも、鍛練や矯正といった厳しい感じが前面に出ている語である。他の英訳聖書ではこれを training (NKJV、NIV) や、discipline (TEV) で表し、日本語では口語訳が「主の薫陶と訓戒によって、彼らを育てなさい」、新共同訳が「主がしつけ、諭されるように育てなさい」(傍点筆者)とする。

このように、必ずしもこの一語によって「主の教育、キリスト教教育は、すなわち養育、キリスト教養育である」と言えるものではないだろう。しかし、引用された聖書箇所「……育てなさい」とされている *εκτρέφετε* が、むしろ「栄養を与え養う、育て上げる」¹³⁾といった養育的要素を持つ語であること¹⁴⁾、また、この「主の養育」によって子どもを育てることが、4節前半の子どもを「怒らせる」方法との対比で語られていることからみて、ブッシュネルがこの聖書箇所から、養育的要素を色濃く受けと

り、ここに彼の養育論の土台をおこうとしていることは明らかだと言える。いずれにしても、「主の～」と特定して言われる方法はあるのだ。そこで、ブッシュネルは、引用に続いて、喜びを持って「主のやり方」があることを強調し、宣言する。

「主の養育」と呼べるものがある。その養育の質と力(素晴らしさ)は、神から送られるものであるが、わたしたちが同じように伝え合うことができる養育でもあるのだ。¹⁵⁾

つまり、困難を極めるわたしたちのキリスト教教育・保育の現場には、他の「人間の教育法」では及びもつかない「主の教育法」と呼べるものが、必ず届けられていて、しかもその「主のしつけ方と言葉づかい」、「キリスト流の子育て」とでもいえる神からの贈り物は、それを受け取るわたしたちが共有し、伝達し合って実際に使えるものなのだ、というのである。

それでは、そのキリスト教に独特の「主の教育法」のユニークさはどこにあるのだろうか。ブッシュネルは以下のような問いと答えを提示する。

ほんもののキリスト教教育とは何か?—それは、子どもがキリスト者として成長し、自分がそれ以外の何者でもない者として生きていくようにすることである。

だからキリスト教育は、「子ども時代は罪の中で成長しておいて、大人になったら回心できる」ということに向かってなされるものではない。そうではなく、「子どもはスピリチュアルな面において新たにされた者として世界に立つことへと招かれている(開かれている)」ことを見据えてなされるものなのだ。つまり、子どもは、いつ、どんな回心経験をしたかを言えることよりも、生まれた時からずっと「最もよいもの」を愛してきたのだと感じられる中で育つ

10) 本稿は、2010年9月1日に開催された聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター公開講座において「今日のキリスト教教育・保育のために—古典的名著ブッシュネル『キリスト教養育』をよむ」と題して筆者が講演をした内容を踏襲して、論を進めたものである。

11) *Christian Nurture*, p. 9

12) 玉川直重『新約聖書ギリシャ語辞典』キリスト新聞社、1993、p. 292。

13) 同書、p. 132。

14) 節の後半は、*ἀλλὰ εκτρέφετε αὐτὰ ἐν παιδείᾳ καὶ νουθεσίᾳ κυρίου* で、ギリシャ語を逐語的に英訳すると、“but nurture them in (the) discipline and admonition of (the) Lord” となる。

15) *Christian Nurture*, p. 9

ことの方が大切なのである。¹⁶⁾

著作を一貫して流れる「主の教育法」とは、子どもたちは、生まれてすぐから、主によって霊的に新たにされて、よいものを愛してよいものに向かって生きるように方向づけられる存在、つまりキリスト者として生かされる者なのだということに信頼を置く教育である。そしてそのような者（キリスト者）として子どもたちをとらえ、そのように（キリスト者として）生きていくように、キリストの養育方法によって育てていくことに他ならない。

無論ブッシュネルは、キリスト者として生きるのに十分な要件や環境が、幼い日に備えられない場合もあることに言及し、「後年、感覚ではなく知性によって物事を理解するようになってからそれを備えられる子どももいる」¹⁷⁾とし、様々なケースがあることを認めている。大人になってからの回心は、否定されない。しかし、わたしたちが最も大切にするのは、「主の養育」の中での子どもの生と育ちであり、それを何よりも目指していくことなのである。

「主の養育」の中での子どもの生長という、ブッシュネルの主張を理解する上で重要なのは、彼が、子どもたちの中には大人の目には見えない、seeds of holy principle¹⁸⁾聖なる本源の種が蒔かれていると考えている点である。聖なる源、それは、「神のみ心に適った行動指針」とも「わたしたちをキリストによってよいものへと方向づける原動力」とも言えるものである。「このように生きたい！」と願う思いを起こさせる源、つまり、わたしたちが生き、行動する際のエネルギーを方向づける法則や信条は、キリストの養育の場で育てられる子どもたちには、ごく幼い日に神によって¹⁹⁾種として蒔かれる。そして「その根っこは必ず残っていて、大人が霊的な沈滞の後に信仰を再燃させるように、それは時を

得て息を吹き返し、発展する」²⁰⁾のだと、ブッシュネルは確信するのである。

種の間は目には見えず、それがいつ芽を出して宗教的なものへと変化するのは、わたしたちに隠されている。それは神の一方的な恵みの出来事なのである。こうして、わたしたちはただ、「自分たちの教会を子ども時代の『聖なる養育の学校』とし、子どもたちが主の家の中にある植物として、そこで育っていくことを期待する」²¹⁾のである。「自分たちの教会」をそれぞれの教育・保育の現場に置き換えて考えてみると、ブッシュネルの語る「主の養育」と呼ばれるものは、神の恵みに信頼をおくところの慰めに満ちた営みとして、教育者、保育者、そして親たちに映るものではないだろうか。

2. 「キリスト教教育」と呼ばれているものの誤り

ブッシュネルの提唱するほんもののキリスト教教育、主の養育は、述べてきたように恵みの出来事としてあるはずなのだが、彼は現実には「キリスト教教育」を名乗って行われていることが、恵みとは全く逆の弊害を生み出していることを、著作全体の中で何度も痛烈に批判する。²²⁾

……かえって、キリスト教養育と呼ばれているものの多くが、宗教というテーマを非常に不快なものにしてしまっていることだけは確かである。そして、その嫌悪感、宗教的な教えを受けた量に比例しているらしいことも、わかっているのだ。²³⁾

彼は、ここまで語気を強め、興味深い例をあげる。宗教的ではないが、礼儀正しくまっすぐに育てられた快活な青年が、あるときキリスト教と人生を変えられる出会いをし、強い反感や闘いを感じることもな

16) Ibid. p. 10

17) Ibid. p. 10

18) Ibid. p. 11

19) 「神によって」は、ブッシュネルの強調する点で、第1章の別の箇所にはこのような記述がある。「キリスト教信仰は、……キリスト自らが、母の胎内にあるときから私たちを聖別し新たに生かすことができる聖霊によって、子どもの心に実際に吹き込むものなのである。」Ibid. p. 19

20) Ibid. p. 12

21) Ibid. p. 26

22) 第1部2章のⅢ-2においては、信仰的とされている家庭での養育の失敗の原因が詳述されているほか、3章は、誤って「キリスト教教育」と呼ばれているが実は全く違ったものである教育を「だちょうの養育」と呼んで批判している。第2部4章では、「信仰をいじけさせる扱い」として、「キリスト教教育」と呼ばれているものが、子どもの信仰心を挫いていく教育方法を具体的に指摘している。

23) Ibid. p. 18

く、クリスチャンとなり、喜んでその生涯を全うする。他方で、キリスト教教育を受けた結果、苦闘の末に回心させられなければクリスチャンにはなれないという教えに気持ちを挫かれ、人生の終わりまで、宗教に心を閉ざし、あるいは敵意さえもつにいたる者がある。これらの事例は、「キリスト教教育」と呼ばれているものに対して、大きな疑問を引き起こし、信仰を持つ親とクリスチャン、教会、そしてキリスト教教育・保育者たちを鋭い批判と問いの前に立たせずにはおかないだろうと、ブッシュネルは語る。²⁴⁾

実際に、彼は、「信仰者の生き方は悲しいほど不完全で、その行為は自己満足のためになされ、hardness（厳しさ、冷淡さ、堅さ）と rudeness（粗雑さ、無礼、粗野）はあるのに、見えないものへの感受性を欠いている。多くのクリスチャンは、愛への忠誠よりも、支配することへ忠誠を示し、温かで愛情に満ちた家庭的²⁵⁾な性質に乏しく、周囲にキリスト教的雰囲気をかもし出さない。」²⁶⁾とキリスト者を描写する。クリスチャンの特徴として使われている表現を、自らに当てはめてみれば、それが決して遠い昔のクリスチャンに向けられたものではないと感じられるのではないだろうか。

ブッシュネルは、このような信仰者である大人、親、教師によってなされる「キリスト教教育」と呼ばれているものを、繰り返し問題にする。特に彼は、1. 大人の ill-temper（邪悪な気質・残酷な気性）が、子どもの柔らかで優しい感受性を傷つけ、子どもの自信を失わせ、怒らせてしまうこと、2. 大人の過度な要求や、その子どもの年齢や状態にふさわしくない課題を負わせることが、子どものやる気や思いをくじくこと、をあげ²⁷⁾、それらは大人がしてはならないことなのだとして厳しく非難するのである。

このように「キリスト教教育」と呼ばれているものは、子どもたちには、時に生涯にわたる不信感や嫌悪を宗教に対して植えつけることになり、親や大人たちには、「主の養育」を信頼できないという不信仰のゆえに、子どもたちの今に対して、いつも満

足できないイライラした状態を生み出してしまうのである²⁸⁾。彼のこの指摘は、今日においても重大な問題だろう。親や教師が感じる「足りなさ（不満）」は、ありのままの子どもの受容を拒み、不機嫌や憤り、辛らつな非難や否定的評価の言葉となって発せられる。そしてそれは、また、受け手となる子どもの中に、更なる萎縮や自尊心を傷つけられた怒り、自分は「足りないものである」という低い自己評価を生む、という悪循環を養育・保育・教育と言う場に構築しているということなのである。

このように、問題で、危険ですらある「キリスト教教育」と呼ばれる働きに対して、ブッシュネルは「もっと別の穏やかな行為（動き）の形」²⁹⁾があるのではないかと提唱する。

教えるよりよい何か、単なる努力や意図的教育を超える何か—が求められている。それは、よく生きることへの愛着、信じることがもたらす安らぎ、高い夢を持ち続けられるという自信、聖霊が与える神聖で明るい自由……そういったものが若い魂を包み込むようにして育つところの、温かくて心地よい養育である。このような中で、「沈黙」と「気づかれない（知覚されない）方法」によって、神への宗教的な従順や責任感といったものは形造られていく。これこそがキリスト教養育であり、主の養育なのである。³⁰⁾

ブッシュネルの声は、今も響いているのではないだろうか。子どもたちが、よく、美しく生きたいと願い、夢を持ち続けて止むことなく、つねに安らかで自由である……そんな生き方が叶う教育があるのだ、と彼は語る。ここに、わたしたちが、今日のキリスト教教育・保育の現場を批判的に見つめ直し、検証していく視点と、今までの教育・保育と呼ばれるものが引き起こしてきた弊害や過ちを越えていくヒントが隠されているように思われる。

24) Ibid. pp. 18-19

25) domestic（家庭的）は、ブッシュネルにおいて、非常に重要な意味を持つ。「家」は、そこを「恵みがある中に住んでいるところの『家庭的な聖霊』を保持している場所」(the house, having a domestic Spirit of grace dwelling in it) と解説され、聖霊を形容して domestic が用いられている。Ibid. p. 19

26) Ibid. p. 13

27) Ibid. p. 21

28) Ibid. p. 20

29) Ibid. p. 19

30) Ibid. p. 20

3. 子ども時代の十全な宗教的生長

それではその「主の養育」は、どのように子どもを理解し、子どもにはたらきかけるのだろうか。ここでは、第1部第1章に見られるブッシュネルの特徴的な子ども理解をとりあげる。3においては、子どもの宗教性について、子どもと善悪の問題や乳幼児期の「レディネス」との係りで述べられているブッシュネルの理解を解説し、4では、「有機的関連性」という彼独自の表現で展開される「関係としての子ども」について、述べていく。

ブッシュネルの子どもの宗教性に対する考えを理解する上で、彼がそもそも、「クリスチャンというのは、それ自身の価値のゆえに『よいもの』を、ただただ愛し始めている人のことである。」³¹⁾と語り、一見ユニークと思われる表現でクリスチャンを定義づけていることは、注目に値する。他の基準や評価からではなく、それ自体の「よさ」のゆえに「よいもの」とは、その「よきもの」とされる存在が、自身で「よいもの」として在ることを規定する、と言う意味で、「在って在るもの」³²⁾につながる表現だと言えるだろう。その存在自体を根拠として「よい」ものを「ただただ愛し始めている」人とは、そのよき存在に気づき、他からそこへと心身を方向付けられ、そこに憧れ始めている人なのである。

「いいなあ」と憧憬の目をむけ、羨望するものへ向かって一心に手を伸ばす、同じようになりたいと真似をする、そんなことは大人にも子どもにも（特に子どもにこそ）、起こることであり、「このような愛に生きること」は、子どもの中にも必ず芽生えるもので、「子どもには無理だ」とは言えないものではないか、と彼は考える。そして、「子どもたちが『よきものであろうとすること』は、幼い年齢の子どもができるすべてである」³³⁾とさえ語り、幼い子どもなりの完全な信仰と宗教性を認めるのである。

しかし、子どもの宗教性、Christianity というものは、無論、「すべてのクリスチャンがそうであるように、よきも悪しきもが混在している世界に生きながら、『よいもの』へと方向付けられているにす

ぎない」³⁴⁾ので、悪との闘いや「よいもの」をめぐる葛藤は、大人同様に子どもにおいても体験され、勝ったり、負けたりは、生涯通じて繰り返されることになる。しかしそこで、神の霊に導かれた養育の場に置かれた子どもたちは、「悪に落ち込んで救われる」という恵みの経験を積み重ねることによって、自らのうちにキリストの徳が育まれていくのである。こうして、子どもの宗教性をめぐって、ブッシュネルは、彼が性善説ではないこと、それゆえに彼において教育は、本来あるものを引き出すという形で理解されてはいないことを示している。³⁵⁾

「主の養育」によるならば、子どもたちは必ずや「よいもの」「正しいもの」へと方向付けられ、それを愛するようになる。だから、実際に親や保育者、教師たちが気をつけておくことは、「その愛が、愉快なことを求める自然な感覚から来る単なる興奮とは区別され」³⁶⁾て、子どもに経験されるようにすることだけなのである。

子どもは優しい気持ちで触れられることによって、押し出されるようにして、真実なものへと向けられていくべきであると同時に、自分の中に生きて働き、形作る力（＝聖霊）を受け取り、愛自体のよさのゆえに、「霊によって創りなおされた愛」によって、愛するようになることが大切なのである。³⁷⁾

ブッシュネルはここで、愛はその源泉によって種類が違い、それによって姿が変わること述べ、注意深く見極めて子どもの中に育てなければならないことを語っている。「感覚的で興奮を得るための愛」があり、それは言わば熱狂的、自己充足的な愛し方となって表れる。子どもの宗教性、よいものを愛するようになることは、そのような、欲求を満たすためなら時に癡癡やねたまさえ起こすような気性の激しい、むき出しの愛情に動機づけられて子どもたちの中に形成されてはならない。そうではなくもうひとつの愛、「霊によって創りなおされた愛」で愛する者となるようにと言うのである。

31) Ibid. p. 16

32) 旧約聖書出エジプト記3:14にある、モーセに示された神の名。

33) Ibid. p. 23

34) Ibid. p. 16

35) Ibid. p. 23

36) Ibid. p. 24

37) Ibid. p. 24

それは、優しい気持ちで触れられ、愛自体のよさとその自発性によって背中を押し出されるようにして育まれるところの愛であって、これはまず、子どもに接する大人、親、保育者、教師たちが、このどちらを自らの中にもち、子どもたちに提示しているのかを問う言葉である。わたしたちの中に生きて働き、わたしたちを形作る聖霊の力を謙虚に認め、受け容れながらその愛で愛するとき、子どもたちの中に同じ愛がもたらされる。ここに、ブッシュネルが、子どもの宗教的生長を起し促す必要不可欠な要素として、何よりも聖霊の力を考えていること、同時に、それを具体化し持ち運ぶのは、もっとも身近な養育者であると理解していることが示唆されている。

そしてこの、力ある聖霊は、「あらゆる年齢のあらゆる魂を満たしつつ、霊の養育はすべての年齢にそれぞれふさわしくなされる」³⁸⁾ものであるのだが、つまり、「主の養育」はどんな年齢の人にも及ぶのだが、一方で「子どもはなんと、『よいもの』に魅了される準備ができていようことだろう」³⁹⁾ことも、彼には感嘆に値する真実なのである。もともと、よいものが分かち合われるのに早すぎるということはない、とするなら、乳幼児期と子ども時代は、よきものへと結びつき始めるのに最も適した時であることは、彼にとって当然の理なのである。⁴⁰⁾

Christian Nurture において、子ども時代こそ宗教性を養育するのに最も適した時であるという考えは、非常に頻繁に繰り返して現れ、特に、子どもにとっての善悪、墮罪と救済をめぐる主張されている。これは、懺悔と回心による新生経験が強調された時代的背景を映したものであり、ブッシュネルが、特に子どもについては、知的概念や意志を最重視し、きわめて個人主義的で感情的な信仰告白だけを持って信仰や宗教性がもたらされるとすることに異を唱え、その危険性を嘆くように告発していることがうかがえる。

人間はその本性において墮落しているとして、そこからの救済を求めてそれに着手し始めるのに、もっとも適した時期はいつだろうか？ 悪が善に対して未熟で、言わばいいなりにになっている間か、それとも悪が罪にまみれた習慣を幾年も繰り返して確固たるものになってからか。……また、無条件に子ども時代が純真な年代であるように、実際に人の心が宗教に惹かれていくのに、最も変化しやすい時とはいつだろうか？⁴¹⁾

たとえば、この疑問文の連なりも、子ども時代こそが、「頑固な大人とは比べものにならないほど、悪の醜さ、善の尊さを身につけやすい」⁴²⁾ことを語るためのブッシュネルらしい表現である。無論、幼い時代の子どもは、「宗教的刷新の宗教哲学や、形式的な教理を知的に受け取るわけではないが、そのような時にも、正しい霊は子どもに着実に働きかけている」⁴³⁾ことは、聖霊の働きを確信するブッシュネルには、自明のことである。

その聖霊の働きにたいして、もっともしなやかで柔らかな心を差し出せるのは、明らかに子ども時代であって、それ以上の時はない。だから子どもは、親の権威の下に置かれ、抽象的原理によってではなく、日々のエクササイズ⁴⁴⁾を通して、そこに体现される両親への従順を学び、それが、よいものへの従順を受け取るための訓練になるのである。こうして子どもは喜んで、子どもなりの仕方、クリスチャンとしての振る舞いを身につけていくのである。⁴⁵⁾

4. キリスト教養育の基礎としての「親子の有機的つながり」

このように宗教的で、最も主の養育を受けるにふさわしい幼い子ども時代の養育を考える上で、ブッシュネルが強調し、その理論と方法論の基礎とするのが「親子間の人格的な有機的結びつき」である。

38) Ibid. p. 16

39) Ibid. p. 22

40) Ibid. p. 23

41) Ibid. p. 21

42) Ibid. p. 23

43) Ibid. p. 23

44) ブッシュネルは宗教性の養育の方法として、しばしばこの *exercise* エクササイズの語を用いている。注29参照。固い、形式ばった儀式に反対する、「日々の練習、実践、生活の中にある行為や動き」といった意味が込められていると思われ、特に保育、養育の方法論に対して示唆を与える。

45) Ibid. pp. 24-25

……親と子の関係について綿密に吟味するならば、わたしたちは、親子間に存在し人格にかかわるとされる有機的な関連の法則 (a law of organic connection) のようなものを見つけることができる。そのようなつながりの存在は、ある人の信仰が他の人の中へと繁殖させられる(伝えられる)であろうことを確信させ、そのようなことを自然に願わせる。言い換えると、このようなつながりというものは種が小さな果実の中で形作られ、幹から送り込まれる栄養によって熟していき、いつか幹から取れるように、ある人の性質というものは、事実上他の人の中に含まれていると考えられることを語っている。⁴⁶⁾

有機的な、つまり生物(有機体)のように多くの部分や組織が集まり、作用しあって一つの全体を構成するといった密接な関係が、親と子の間にはあるとブッシュネルは主張し、とくに幼児期を過ぎるまでは、「子どもというのは、本当のところ生まれていない状態なのであって、それ以前には決して、親から切り離されたその子らしい個性(個別の本性)を持っているなどとは言えない」⁴⁷⁾とさえ述べている。子どもを果実に例えるなら、果実は、幹=matrix母胎・基盤である親と切り離されては、そもそも発生せず、生きられず、成長しない存在であって、そのあり方も、成り立ちもが、その幹に依って、規定されている。

子どもがこのように、「身体的にも、知的にも、性格的にも、意志することにおいても、この有機的関連に依存し、その有機的なプロセスの中に萌芽として存在する」⁴⁸⁾という認識は、誕生直後から乳幼児期にいたる養育が、いかにその有機的関連の法則に則ってなされねばならないかを考えさせるものとなる。そこで以下に、誕生から子ども期へと向かう子どもの成長発達について、ブッシュネルがどのように有機的つながりを描写、表現しているか、またそこからどのような養育が示唆されるのかを述べて行く。⁴⁹⁾

誕生直後、①「子どもは『受身の塊』(a mere

passive lump) として親の腕の中に抱かれている。」人の子どもは、超未熟児として生れ出る。ある意味でそれは、3キロほどの単なる小さな肉のこぶのようなものにすぎず、その全体重、全存在と命は、抱く人に任せられ、預けられている。子どもを生かすも殺すも、それは親となる存在に委ねられている。

このことの重大さは、わたしたちがキリスト教教育を考える際、妊娠中から特に周産期の親たちへの配慮と備えのための教育に、もっと関心を持つべきではないかとの反省を促す。誕生の瞬間、母胎から切り離されて個となった子どもの危機については、触れられることが多いが、誕生直後の親の不安、恐れや鬱状況についてのケアがなされることはほとんどない。個人的な経験を言えば、初めての子どもの誕生後、一個の生命を腕に渡された時の衝撃と恐ろしさは、生涯に渡って私自身の最も危機的な瞬間であったと振り返る。周産期のキリスト教教育の課題は大きいのではないだろうか。

その後、その全く受動的な存在は、②「両親の魂の下で意識を持ち始め (he opens into conscious life)、親の表情や感情に呼び起こされるように、子どもの応答が起こる」ようになる。少しずつではあるが、受身の程度は変化し、子どもが意識する世界の扉が開き始める。この時期に重要なのは、親—子の呼応関係がしっかりと創られることであり、この応答性の構築は、それ以降の人間関係に強い影響を与えるものと思われる。

ブッシュネルは、この時期の説明の中で、「微笑みは微笑みを引き起こし、悲しみは悲しみを、イライラはイライラを起こさせる。そして愛は、愛そのものの性質にぴったりと合ったまなざし(様相)を開く(広げる)のだから、まして『聖なる愛』はなおさらではないか」と語っている。親の視線が子どものまなざしを誕生させ⁵⁰⁾、親のあらゆる働きかけとエクササイズが子どもの自意識を創っていくということは、未熟な親にとって耐えがたく、恐ろしくなるような試練でもある。しかし、不完全な親であっても、その親が現すわずかの愛が、子どものうちに愛を呼び覚ましてくれるように、「聖なる愛」、完全な愛は、聖霊により親を通して必ず子どもに

46) Ibid. p. 26

47) Ibid. p. 27

48) Ibid. p. 28

49) 以下のプロセスは Ibid. pp. 28-29の記述をまとめたものである。

50) 下條信輔『まなざしの誕生—赤ちゃん学革命』新曜社、1988年、参照。

きかけていて、その愛に見合った応答が、当然子どもたちから発せられるのだと、彼はみているのである。それは、親たちを慰め勇気づけると共に、なぜ、子どもは幼いほどに、無条件に無制限に愛し、愛される存在なのかに答えていると思われる。

そうしているうちに、③「言葉を理解するための耳が開かれるが、押し寄せる感情や何を聞くかを選ぶ権利は、子どもにはない」。言語表現や知性、知的理解というものが開かれて行くこの時期は、子どもの興味や好奇心、冒険心、探究心などの出発点である。しかし、それは同時に子どもたちが最も無防備で傷つけられやすい時でもある。酷い言葉や表現の意味するところを、子どもはすでに理解してしまうのに、そこから逃れること、「聞かない」ことができない、許されない。言語や無視を含む暴力、虐待といったものに最も気をつけなければいけない時期であり、親を取り巻く大人、保育者、教会等の注意がここに向けられる必要のある時期だといえるだろう。

こうして徐々に、④「親は、意志に訴えることによって子どもを支配（管理）し始める」。子どもは意志を持ち始め、「いやだ」と言うことができるようになってはいるが、親の要求は子どもにとっては「命令」であって、子どもはそれにほとんど逆らえないのである。こうして「次に親たちは、自分たちが当然果たすべき務めとして、学校を決め、読む本を決め、付き合う友達を限定し、どの宗教の教えを受けさせるかを決めて、自分たちが選んだ教会へ連れて行く」。これらの記述は、親の宗教、親の価値観と常識が、子どもの宗教性や社会性、道徳性と言ったものを、スタートラインである程度囲い込むように規定していることを考えさせられる。

そのように生きる場所や付き合う人たちをある程度決められて生きている内に、子どもはだんだんと、「個性ある被造物としての自分の責任や適当な位置へと近づいていく」ようになる。自分らしい姿だと思われるところへ接近していき、「ついに、子どもは、親が手渡してくれたそのように、悪いことにおいても、よいことにおいても、自分の役をとる（本分を果たす）ようになる」のである。自分の本分、自分が求められ、自分でもそれらしいと思うあり方を生きる、あるいは演じる「わたし」の歩みが

始まると言ってもよいだろう。

しかし、そこへの過程、「ただ親から受け取るだけの依存的存在から親を離れていく全行程」を通して、こどもは、実は、「親たちの行動とやり方を自分の中へと平行移動（転換・転移）させている」にすぎないことは明らかである。そこで、一人の子どもの自由意志や主体性というもの、あるいは個を持った人格や性質というものは、それを持つよりずっと前に有機的に創られていて、親たちの意志と性質を基盤とし、その影響下でデザインされたものだといえることができるのである。

この後子どもは、さらに「自分の判断と親の判断が入り混じる時期を経て」いくのであるが、「すべての年代において、わたしたちの性格が有機的法則の届く範囲から外れることはない」とすれば、「キリスト教教育は、養育もしくは栽培（耕作・育成）(nurture or cultivation) から始まるということこそ、まさにキリスト教教育の着想（見解・認識）なのだ」とするブッシュネルの結論も、ある程度理解することができるのではないだろうか。⁵¹⁾

子ども、ひいては人間存在を有機的関連の中にとらえることにより、「完全に他から分離した個人などというものはフィクションであり、存在しない」⁵²⁾とするブッシュネルの主張は、現代社会が直面する様々な分断と深刻な差別化に対抗し、教育・養育・保育における関係性あるいは共同性の回復・再生の意義につながるものだと言える。

結 び

このようにブッシュネルは、『キリスト教養育』1章Iにおいて、神とわたしたち人間との共同作業としての、あるいは共通の、共有できる教育・養育の存在をまず明らかにしようとする。その「主の養育」は、何よりもキリストが直接、聖霊の働き、「聖なる愛」を用いて子どもの内になされるものであるが、誕生と人生の出発の時点で、子どもと有機的・人格的なつながりを持つ親の日常的で domestic なエクササイズの中で展開されるものでもある。この両者の働きによって、子どもは「キリストにあるもの」として生かされ、子どもなりの葛藤や矛盾、悪との闘いの中にあっても、真実でよいもの、美しいものを繰り返し求め、目指して人生を歩いていこう

51) Christian Nurture, p. 30

52) Ibid. p. 32

とするのである。

これらの考えは、現代のキリスト教保育・教育のよって立つ理論を振り返らせ、「宗教教育」と「養育」の理論によって揺さぶる。特に厳しく正統主義的な教育観や教会論、弁証法神学の影響を強く受けた意識的信仰告白の位置づけ、個別であることと主体性に偏った子どもの発達理解などを見直すための、批判や検証の視点を与えるものだといえるだろう。

また、今日の教育・保育の現場に対して、具体的、実際の示唆を投げかけ、多くの課題提起をなすものである。たとえば、教会については、信仰継承を「家族伝播」を基礎にして考え直し、幼児洗礼と両親教育（ひいては成人教育）の充実に目を向けることが考えられる。また、現在ニーズの高い保育現場には、幼稚園でのキリスト教保育をそのまま適用するのではない、乳幼児保育の可能性の開発を促し、幼稚園においては、特に3歳児（ナースリー）の位置づけと再検討や、幼児期つまり親の影響と子ども意志が混在する独特の時期への研究と、相応しいキリスト教養育の在り方の探究が求められる。また両者ともに、「親の保育」への真剣な対応と取り組みが強く示唆されることは言うまでもない。さらに、「主の養育」を実際に持ち運ぶ親の代理人としての保育者についても、その存在意義と理解に新たな光を与え、キリスト教保育を担う保育者の養成について、反省と検証、そして学びの論拠を与えてくれる多くの見解がここに込められているのではないだろうか。

日本のプロテスタントキリスト教は、その宣教に

において、言葉をそのよりどころとし、中心として行ってきた。しかし、ブッシュネル自身引用しているように、「教育は、説教とおなじように、まさに恵みの手段である」⁵³⁾ことをわたしたちは再認識し、「神を愛することをより早く学ぶことは、神への愛においてより深い慰めへと導かれる」⁵⁴⁾という恵みの中で子どもたちが生きることへ向けて、教育・養育の業を進めて行くことを、今求められているのではないだろうか。

〈参考文献〉

- ・ Bushnell, Horace, *Christian Nurture*, (New York: Charles Scribner & Co., 1867)
- ・ 安達寿孝「ホーレス・ブッシュネルのキリスト教養育における家庭観」『金城学院大学論集人間科学編』19号、1994年
- ・ 今橋朗、奥田和弘監修『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010年
- ・ NCC 教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み』教文館、2007年
- ・ 奥田和弘「H. ブッシュネルにおける信仰の教育」『聖和女子大学論集』第2号、1972年
- ・ 小見のぞみ「田村直臣の見た『子ども・キリスト教・教育』」、『日曜学校教案誌にみる日曜学校教育』聖和大学キリスト教と教育研究所、2003年
- ・ 下條信輔『まなごしの誕生—赤ちゃん学革命』新曜社、1988年
- ・ 玉川直重『新約聖書ギリシャ語辞典』キリスト新聞社、1993年
- ・ ブッシュネル, H. 著、森田美千代訳『キリスト教養育』教文館、2009年
- ・ 森下憲郷「築地居留地における幼児教育の源流」、『近代文化の原点—築地居留地』Vol. 1 築地居留地研究会、2000年
- ・ 森田美千代『ブッシュネル『キリスト教養育』の成立過程研究』日本キリスト教団出版局、2005年

53) *Christian Nurture*, p. 25. Baxter のことば。

54) *Ibid.* p. 25